

## 『マドモアゼル』研究

— 連載小説を中心に —

近藤洋子

『マドモアゼル』は、小学館が未婚の女性向けに、昭和三五年一月号から、昭和四三年三月号まで刊行した月刊誌である。

先に、拙論「連載小説と読者—戦後女性雑誌『マドモアゼル』にみる—」<sup>1)</sup>において、創刊号から掲載された「途上」(曾野綾子)と、「二十歳の設計」(源氏鶏太)について、読者投書の面から考察し、掲載される投書と掲載号全体の編集方針は一致することを論じた。本稿では、創刊号(昭和35年1月)から、終刊号(昭和43年3月)までに掲載された連載小説二二編全体についてみてゆき、『マドモアゼル』の終刊について考えたい。

### I

創刊号から終刊号までには、次の二二編が掲載された。

- 「二十歳の設計」源氏鶏太(35・1〜36・3)
- 「途上」曾野綾子(35・1〜35・12)
- 「永遠のためいき」新田次郎(35・1〜35・12)
- 「殺人者」原田康子(36・1〜37・4)
- 「禁断」石原慎太郎(36・4〜37・5)
- 「紅い白描」松本清張(36・7〜37・12)
- 「連舞」有吉佐和子(37・1〜38・5)

『マドモアゼル』研究

- 「湖影」三浦哲郎(37・5〜38・3)
- 「肉体の学校」三島由紀夫(38・1〜38・12)
- 「ずべ公天使」吉行淳之介(38・1〜38・12)
- 「嫁さん」壺井栄(38・4〜39・3)
- 「翳りある微笑」黒岩重吾(38・10〜39・5)
- 「青年時代」源氏鶏太(39・1〜40・3)
- 「人形姉妹」円地文子(39・4〜40・6)
- 「青い血の娘」柴田錬三郎(39・4〜40・3)
- 「雲よ汝は」丹羽文雄(40・4〜40・12)
- 「青春海流」富島健夫(40・4〜41・3)
- 「協奏曲」遠藤周作(40・8〜41・7)
- 「花燃える」佐伯千秋(41・4〜42・3)
- 「乱舞」有吉佐和子(41・5〜42・1)
- 「夜会服」三島由紀夫(41・9〜42・8)
- 「愛の重荷」源氏鶏太(42・4〜43・3)

この二二編の主人公をみると、十五編が、十代後半から二十代前半の若い未婚の女性である。

例外は、三島由紀夫「肉体の学校」の離婚経験のある中年の上流階級の女性、吉行淳之介「ずべ公天使」二九歳の大学助教授の男性、黒

岩重吾「鬚りある微笑」三五歳の男性独身のホテル社長、源氏鶏太「青年時代」の二八歳独身サラリーマン、富島健夫「青春海流」の九州男児大学生、有吉佐和子「乱舞」の日本舞踊家元夫人、源氏鶏太「愛の重み」三四歳の独身BG (business girl)の略語。このBGに親兄弟はない)、の六作品である。ただし、「青春海流」(富島健夫)の主人公が恋する相手は、若い未婚女性で、その恋愛模様が描かれているのだから、例外にしくなくてもよいかもしれない。

若い女性主人公は多くが仕事を持つBGである。職種は身近なものとしては事務員、新しい職業としては、ファッションモデル、アナウンサー、デザイナーなどが設定されていて、読者に近い存在と、あこがれの世界が混在している。

もう一つの特徴は、若い女性主人公の作品十五編の内、七作品が、片親か、両親が無く祖父母に育てられたという設定の多さである。源氏鶏太「二十歳の設計」、曾野綾子「途上」、有吉佐和子「連舞」、三浦哲郎「湖影」、壺井栄「嫁さん」、円地文子「人形姉妹」、柴田錬三郎「青い血の娘」である。この十五家族のうち、七家族に親が欠けているという状況は、現実社会では考えにくい。

秋山正美は『少女たちの昭和史』において、「少女小説」がヒットするための条件として、悲劇のヒロインが不幸をくぐり抜けてついに幸せになる、というパターンが必要と述べ、たっぷり泣かせてからほっとさせる、というハッピーエンドの作品が過半数を占めると指摘している。

では、『マドモアゼル』の家庭的には不幸な主人公たちはどうか。前述の七作品の中で、ハッピーエンドと考えてもよさそうなのは、「二十歳の設計」「途上」「湖影」の三作品である。「連舞」の主人公は家元夫人になったものの空虚な生活を送る。「嫁さん」では、祖母が急死し祖父とも別れなければならなくなる。「人形姉妹」「青い血の娘」はともに自殺してしまう。不幸の果てに幸せを得る、という形ではない。

この薄幸の女性主人公に対する読者の反響はどうか。

薄幸ものの「途上」と「二十歳の設計」について、創刊当初には設けられていた、小説の掲載ページに載った読者投書欄の「読者の手帳」をみてみたい。

「二十歳の設計」の第七回に『マドモアゼル』の一番の魅力は、この「二十歳の設計」です。ヒロインの杏子と同じ歳で、同じような境遇にある私は、杏子と一体化してしまった気持ち。茨の道を歩むこの兄妹に、早く暖かい太陽が輝くように。栗村兄妹よ、がんばれ！(広島 友里武子)が載っている。また「途上」の第九回には、「どんなときにも心から愉快になれる流子に、たまらない同情を感じます。『悲しみの多い人ほど喜びも多い』って言葉が、流子のための言葉であるように願っています。(鳥取 桜井真由美)」があるが、前述の秋山正美が分析した少女小説に対する反応に近いものである。

雑誌全体についての投書欄である巻末の「愛読者の窓」には、「途上」に好意的なものが四件掲載されたことは前掲拙論で述べたが、「途上」以外に好評だったのが「二十歳の設計」(一件)「協奏曲」(一件)である。これら以外に終刊までに載った小説に関する投書は他に二件で、「井上靖、石坂洋次郎、三島由紀夫、石原慎太郎、安岡章太郎等の作品を希望」と「もっと朗らかなものを」という要望である。

編集長の桜田正樹は『マドモアゼル』に、文芸誌の面を出したかったのだが、当時の婦人誌にとって小説はどのような位置づけにあったのか。

昭和三六年四月号の『新刊ニュース』は、「編集長大いに語る」と題して婦人誌編集長の座談会を掲載しているが、そのなかで小説についての言及がある。出席者は、『主婦の友』森本栄、『婦人生活』島崎弘、『主婦と生活』出海偉佐男、『婦人公論』三枝佐枝子、『婦人画報』矢口純、『若い女性』久保田裕、司会は評論家の十返肇である。

十返の「小説によって売れ行きが増したり、減ったりすることがあるか?」という質問に対して、『婦人生活』の島崎は「ないんじゃないか」と答えているが、『若い女性』の久保田は「雑誌を買った動機には小説のウエイトは少ないが、よかった面ではぐっと上がってくる」「固定読者をつけるということでは大きなウエイトになる」と答えている。また、『婦人公論』の三枝は、「相当小説にウエイトがあるが、何本かのうちの一本でというのではなくて、四本とか五本の持つ力、それが非常に強かった」と答えている。司会の十返はこれを受けて「やっぱり、連載小説の順位となるとむづかしいでしょうね。今、安心して頼める小説家というとはっきりいって、十人といないでしよう」と応じている。

実用雑誌にとって小説は、購買力に結びつくのに必要だけでもインにはならないというのは、それを売り物にはしていないのだから当然なのだが、小説に力を入れている『婦人公論』でも複数の魅力ある作品が並ばなければ売れ行きは伸びないというのである。

この三枝の、魅力ある作品が一本だけではだめで、何本も並んでいなければ売れないという発言を参考にしながら、『マドモアゼル』がどの時期に売れたのかをみてもみる。

毎日新聞社が昭和二年から毎年「全国読書世論調査」をおこなっていたが、このなかの「いつも読む月刊雑誌・ベスト20」に『マドモアゼル』が初登場するのが、創刊二年後の昭和三七年度で、十九位である。ちなみに一位は『リーダーズ・ダイジェスト』、二位『文芸春秋』、三位『主婦の友』である。『婦人公論』は前年度の九位から順位を上げて六位である。『婦人公論』の連載小説は、伊藤整「虹」、川端康成「美しさと哀しみと」、有吉佐和子「香華」、松本清張「影の車」であった。『マドモアゼル』の連載小説は、原田康子「殺人者」(36・1〜37・4)、石原慎太郎「禁断」(36・4〜37・5)、松本清張「紅

### 『マドモアゼル』研究

い白描」(36・7〜37・12)、有吉佐和子「連舞」(37・1〜38・5)、三浦哲郎「湖影」(37・5〜38・3)、三島由紀夫「肉体の学校」(38・1〜38・12)、吉行淳之介「ずべ公天使」(38・1〜38・12)である。三八年度も十九位。連載小説は、「連舞」、「肉体の学校」、「ずべ公天使」、壺井栄「嫁さん」(38・4〜39・3)、黒岩重吾「翳りある微笑」(38・10〜39・5)、源氏鶏太「青年時代」(39・1〜40・3)。

「全国読書世論調査」で最も順位が高いのが十五年度で三九年度である。このときの連載小説は「青年時代」、円地文子「人形姉妹」(39・4〜40・6)、柴田錬三郎「青い血の娘」(39・4〜40・3)。

四十年度は十六位に下がるが、「人形姉妹」、丹羽文雄「雲よ汝は」(40・4〜40・12)、富島健夫「青春海流」(40・4〜41・3)、遠藤周作「協奏曲」(40・8〜41・7)が連載された。これ以後昭和四三年に刊行を終えるまで、ベスト20に入ることはなかった。

桜田正樹は、『婦人公論』に倣って、昭和三九年「読者賞」を新設し、昭和三八年四月号から、三九年三月号まで一番好評だった記事に贈った。第一回の受賞は有吉佐和子の「連舞」であった。しかし、翌年受賞したのは小説ではなく、上坂冬子の「BG講座」であった。トップBGになるための心構えと秘策を説いた連載である。第二回「読者賞」の第一部門(一般教養記事)の候補には、「BG講座」のほかに「青年時代」「青い血の娘」「人形姉妹」の小説三作品と、紀行連載の「アメリカ紀行」(井上靖)が上っていたが、選考委員(石井好子、臼井吉見、奥野信太郎、中島健蔵、丹羽文雄、三宅艶子、相賀徹夫小学館社長)の討論により決定した。三九年度は、「全国読書世論調査」で、最高位の十五位であったが、それに貢献したのは、「BG講座」だったのかもしれない。

このときの連載小説が、「翳りある微笑」「青年時代」「人形姉妹」「青い血の娘」だったことが、影響していないだろうか。「翳りある微笑」も「青年時代」も若い女性が主人公ではない。また、「人形姉妹」

と「青い血の娘」は主人公こそ若い女性だがハッピーエンドではない。また、三八年に連載された吉行淳之介の「ずべ公天使」は、大学助教授花岡文雄に作者が傾斜したために、読者の不満の投書が編集部に山積したという。読者は身近に感じられる若い女性が主人公の小説を好んだと考えられる。「マドモアゼル読者賞」は二回で途絶した。桜田編集長は、「できるだけ著名作家を投入した」のだが、読者の反応はそれほど芳しいものではなかった。

作家に作品を依頼するときに『マドモアゼル』では、当然編集方針を伝えていた。「きわものや暴露的ゴシップ中心の雑誌ではなく、読む雑誌・考えさせるものがある雑誌を目指していること、純文学ではないが、若い女性を対象としたものであること」などを話したと、副編集長をされた永井路子氏に教えられた。

しかし、その一方で、依頼を受けた作家たちはかなり自由に執筆していることが伺えるアンケート結果がある。『朝日ジャーナル』（昭和三九年五月十七日号）の「アンケート・作家から見た読者」である。以下に『マドモアゼル』に連載した小説家たちの返答をあげてみる。

◎質問1、創作に当たって「ご自分の読者（層）」をどのように想定されますか。

・源氏鶏太 自分の読者を意識したことはない。自分の好きなように、自分なりに満足できるように書く。

・丹羽文雄 女性読者の増加は、戦後の一つの特色である。私の本がよく読まれるのは、女性が多いせいだと思っている。

・吉行淳之介 文芸雑誌に書く場合は念頭におかない。鑑賞家としての自分を読者代表にする。書上がった場合には狭い読者にしか感じられないだろうなと思う。

・三島由紀夫 日本語について鋭敏な美的感覚を持つ人たちで、かつ、

小説を読むときに、細部の味わいをたのしむことのできる人たち。

◎質問2、作品発表の場と機会によって、いくつかの異なった読者像を念頭におかれますか。

・源氏鶏太 そういうことはありません。あくまでも自分です。

・丹羽文雄 私の作風になじんできれる読者が多くなった。私の新聞小説は、心理描写をやり、ひとつの特色を持っている。それになじんできたようである。

・吉行淳之介 マスコミの場合、商品だから意識して書く。しかし、週刊誌の種類によって差別することはない。

・三島由紀夫 ある程度仕方がない。しかしこちらの基本的な原則は変わらない。

という具合である。源氏鶏太は読者に頓着せず自由に書くといい、丹羽文雄は読者の方が自分に近づいてきたとこたえる。吉行淳之介と三島由紀夫は、商業雑誌ということは意識しても、資質を変えるようなことはしないと微妙なこたえ方をしている。

## II

このように「アンケート・作家から見た読者」の結果では、掲載誌を意識するか否かは作家によって違うのだが、意識する場合どのような書き分けるのだろうか。

「愛読者の窓」で最も多くの好評が掲載されていた曾野綾子について、ほぼ同時期の作品をみることによって考えたい。

取りあげた作品は、「女神出奔」（『婦人公論』）、「志鎌深雪の青春」（『マドモアゼル』）、「能面の家」（『オール読物』）、「一日一善」（『文学界』）、「諦めない女」（『婦人生活』）の五本と、「途上」である。発表時期は「諦めない女」三四年、「女神出奔」、「能面の家」、「一日一善」

「途上」の四本が昭和三五年、「志鎌深雪の青春」が昭和四二年である。  
(資料として梗概をあげた)

このなかで、女性誌は『婦人公論』『婦人生活』と『マドモアゼル』、『文学界』は文芸誌、『オール読物』は大衆誌に分類される。

同じ女性誌でも、『婦人公論』と『婦人生活』は読者の年齢層が、『マドモアゼル』に比べて高い。『婦人生活』は、昭和二年五月に創刊された実用誌である。創刊の辞に「婦人雑誌は教養と文化の面のみ受け持つものと、生活まで指導するものふたつに分けられるが、『婦人生活』は、文化教養婦人雑誌などが扱う談話・読書・思考の世界より、さらに具体的な行動を記事化して指導する雑誌である。」と生活雑誌を標榜している。「諦めない女」の連載が開始されたときには、鳴山草平「坂田家の四季」、柴田錬三郎「真紅の瞳」、平林たい子「愛と悲しみの時」が連載されている。

「女神出奔」(『婦人公論』)は、語り手は楠田昇という二八歳の青年だが、小説の鍵を握るのは熊楚御堂潔子である。潔子は山中の廃屋のような住まいに暮らす謎めいた女性だが、虚栄に満ちた結婚生活をやめ、自立を果たす話である。「諦めない女」は、精神障害児の保護施設の運営をする西蓮寺千香(三一歳)が主人公。千香は代議士の夫最上熊雄と離婚したばかりである。最上が施設の精薄の娘を妊娠させたからであった。千香は働く女性や母子家庭のために戦うと衆議院選挙に立候補した。しかも、別れた夫と同じ地盤である。妨害にあいながらも千香は当選し、施設を手伝ってしてくれた有馬医師と一緒に離婚して自分の生き方を再確認するという小説である。

「途上」の流子や「志鎌深雪の青春」の深雪には、十代後半から二十代前半の主人公のような、結婚を前提とした恋愛の悩みや潔癖さが描かれている。社会の矛盾に対して自力で向かい合い、解決しようという女性は『婦人公論』や『婦人生活』のほうに相応しいと、曾野は

判断したのではないか。

『オール読物』の「能面の家」は告発状の形をとった推理小説で、恋人の自殺に不審を抱いた青年が、悪質な金融業者を突き止める話である。「一日一善」(『文学界』)は、三五歳の厚生省の役人西田が主人公で、戦争で同級生を死なせてから、戦争や軍隊から逃れられない。戦後、ポイスカウトの少年たちを国籍不明だと思えるほどに、違和感をもった。心に暗い空洞のようなものがある気がした。そんな西田を妻は、軽い非難と侮蔑と同情の目で見る、という短編である。この作品には、これまでみた他の作品では書き得ない、人間の心の複雑な様相が描かれている。

わずか、六編の小説でいうのは危険だとは思いますが、少なくとも『マドモアゼル』については、曾野綾子は明らかに読者を意識し、そこへ向けて書いている。あるいは、『婦人公論』や『婦人生活』の読者と違おうと意識して書いているといえるのではないか。その読者想定が合致して、「愛読者の窓」に四件もの好意的な評が載ったのではないか。不幸な主人公が苦難を乗り越えて幸せになるという少女小説的な作品を、読者が好んだのであろう。

### III

さて小学館の『マドモアゼル』発刊の目的は、「広告収入を増大させる」ことにあった。広告収入はどのように推移したのだろうか。

『マドモアゼル』各年の新年号の全面広告掲載件数を調べて表にした。

	合計
昭35.1	37
36.1	28
37.1	36
38.1	37
39.1	30
40.1	22
41.1	16
42.1	16
43.1	15

(全面広告掲載件数)

創刊号の広告掲載量が多いが、表をみると次第に減っていったのがわかる。毎号最終頁に全広告の案内を載せるようにしたのが、昭和三五年八月号からであるが、全面サイズの広告量と同様の傾向である。

『マドモアゼル』の実売部数は、創刊号六万九千二百八十七部（発行 十九万三千部 三五・九%）、終刊号九万九千百十部（発行 一万部 九〇・一%）だった。

小学館は他社の女性週刊誌（『週刊女性』昭和三二年創刊、『女性自身』昭和三三年創刊）の好調をみて、『マドモアゼル』創刊後三年にして週刊誌『女性セブン』を創刊した（昭和三八年五月五日）。

創刊に当たって『マドモアゼル』刊行三周年記念パーティの席上で、新女性週刊誌創刊を発表している。『雑誌広告98号』（昭和三八年二月）には次のような記事がみえる。「小学館発行の女性総合誌『マドモアゼル』は独自の領域を開拓して発展を遂げているが、一月一八日午後三時からホテル・オークラに広告主、代理店その他関係者五百余名を招待し、盛大な刊行三周年記念パーティを催した。なおこの日、同社では今春中、新たにB5判の『女性週刊誌』を創刊し、誌名を一般から募集する旨を発表した。新女性週刊誌の広告料金は創刊号から三ヶ月間暫定料金として定価の80%で取り扱う」というものである。

昭和三十七年度は初めて『マドモアゼル』が、「全国読書世論調査」のベスト20に十九位で入った年である。勢いのあるうちに、スポンサーを確実な顧客にしておきたいとの出版社としての戦略がみえる。誌名公募の新聞広告は一月十八日、朝日、読売など全国紙に掲載された。新誌名『女性セブン』は二月二日に新聞紙上に発表されたが、誌名公募には、十五万九千四百二十七通の応募があった。

出版社を支える広告収入の増大化をはかるためには、実用性の強い記事を載せ、回転の速い週刊誌が求められたのである。

教養の面を重視し小説に力を注ぎ、どのような傾向の小説が好まれるか模索を続けたが、桜田正樹は創刊から六年四ヶ月で編集長を降りた。少女小説とは区別しながら、じっくり小説をたのしむ若い新しい読者層の開拓を目指したが、長くは続かなかったのである。

昭和四一年五月号から、野口晴男が二代目編集長に就任した。野口は、昭和四一年八月号の『総合ジャーナリズムの研究』（総合ジャーナリズム研究所編）の座談会「女性雑誌のうらおもて」において「いまじゃあわれわれが雑誌の中でどういう社会、あるいは自分の理想社会をどこに置くのかということでも問いつめられますと、多少自分でもグラグラしないでもないわけですけども、しかし、いろいろな問題を読者に投げかけていって、そこから生まれてくるものを期待する。」と発言しており、当初の方針が合わなくなって、模索中であることが伺える。

若い女性の関心の幅が広がって、実用記事もあり、グラビアの映える大判で、小説を読むにしても次回が早く読める週刊誌のほうに読者は流れたのである。

## 【注】

注1 『東海学園 言語・文学・文化』第二号（東海学園大学日本文化学会 平成十四年十二月発行）

注2 『少女たちの昭和史』（秋山正美著 新潮社 一九九二年十二月五日）

注3 詳しくは前掲注1抽論をご覧ください。幸いである。

注4 トーハン発行

注5 『読書世論調査30年—戦後日本人の心の軌跡—』（毎日新聞社・昭和52年8月31日刊）所収による。

注6 『新装版吉行淳之介エッセイメント全集 第五巻』（角川書

店一九七六年)解説(清水信)による。本全集で同作品は「にせドンファン」と改題している。

注7 『雑誌で読む戦後史』(木本至著 新潮選書 昭和六十年九月二五日刊)

注8 奥野健男は、このアンケート結果を踏まえて、『文芸』(一九六六年十一月)の「文芸時評」において、「誰を意識して書くか」と題して、「大衆作家、流行作家は多くの人に読まれているという自信があつて、読者を意識しないで書ける。それにひきかえ、純文学作家たちは、内的イメージを他人に伝え理解してもらいたいと望むが、その読者像が浮かばず、身近な友人や、編集者を意識するという、ある純文学作家の回答は悲痛な告白にほかならない。」と述べている。

注9 『小学館五〇年史年表』(小学館社史調査委員会編集・発行 昭和五〇年十二月十五月初版第二刷)

注10 実売部数については、小学館総務局参与社史編纂室、佐山辰夫氏にご教示いただいた。

#### 【資料 曾野綾子作品梗概】

「途上」『マドモアゼル』35・1〜35・12

新庄流子は病弱な母と、小児麻痺の兄を抱えながらも、聡明に生きようとしている女子大生。彼女の厄介になって伯母の家、林家は船会社を経営する資産家で、同級生の千世がいる。千世は流子のよき相談相手でもあった。流子の姉の須磨子は、暗い家庭に絶望して、妻子ある中年の土木技師、三崎と無理心中した。

流子は、久間木雄三という学生と交際していたが、久間木はいつか千世にも近づき、彼女を身ごもらせてしまう。二人はやがて結婚し、流子の心に深い傷跡を残した。

#### 『マドモアゼル』研究

流子を慰めるのは千世の兄の信也と従兄の祖父江敏行である。そのうち流子の前にもう一人の男性が現れた。林商船の二等航海士の津村である。彼も狂気の姉を持っているのだ。一人はいつか近づいていった。同情をこえて愛情を感じ始めたある夜、流子は津村と口づけをかわした。二人は結婚したいが、それぞれに不具者を持ち、遺伝をおそれて結婚をあきらめた。長い航海に出た津村は、同船した信也に話し、流子とともに生きて不幸を乗り越えてゆこうと決める。

「女神出奔」『婦人公論』35・1〜35・12

楠田昇は一人でハイキングにでかけ、腹痛に苦しみ、一軒の西洋館にたどりつく。一匹の犬と一人のボロをまとった美しい女に迎えられた彼は、手厚い看護をうけた。その家の表札には消えなかった字で熊楚御堂と書いてあった。

楠田の恋人正美順子は京橋デパートの宝石売場に勤めている。楠田の理由を教えぬ外泊に怒った順子の前に、ネクタイピンを直しに、有名な大学教授片貝礼一郎があらわれた。

直ったピンを片貝の家へ届けにいった順子は、そこで高校時代のクラスメイト元子に会う。元子は藤島ガラスの社長の御曹司と結婚している。またその場で順子は、楠田の中学時代の友人佐伯と同和ゴム社長令嬢湯浅治子にも紹介された。

ある夜、片貝の家を訪れた順子は、ばあさんから片貝の離婚した夫人から教わったという、チョコレート・プディングとロシヤ風のお茶をごちそうになった。

片貝は湯浅治子の家を訪れ、結婚の申込みを両親にした。藤島元子はそれを知ってか知らずか、占師の上野比命子に頼んで片貝の結婚はうまくいかぬと予言させることにした。

クリスマス夜の夜、楠田は久しぶりに熊楚御堂の女を訪れた。女は楠田を中へ入れると、ロシヤ風のお茶をすすめ「私、結婚していたんで

す」と呟くのであった。順子は、その夜片貝といっしょに教会の深夜のミサに出席し、幸福感でいっぱいだった。

年が明けると順子の売場へ湯浅夫妻が来て、娘の婚約指輪を注文していった。

楠田は街で佐伯に会った。佐伯は片貝と治子の婚約について話し、声をひそめて、治子には実は左翼的総合雑誌編集者の大津昭夫という恋人がいるのだと語った。楠田はそのことを片貝には言わないように佐伯にすすめる。

四月になり片貝と治子の結婚式が華やかに行われた。故郷の沼津で親類の別荘に新夫婦が落ちついた夜、階段を静かに上ってくる者があった。

熊楚御堂潔子であった。潔子は片貝の前妻だった。驚く片貝に向かって彼との結婚生活がどれ程自分を傷つけたか、いかにおろかしいことであったか、それに耐えるのは自分が虚栄心が強いのか、嘘つきだということがわかる心境になったと告げた。楠田も来て、別れた後の潔子の生活ぶりを話し、治子と大津が今、車で去ったと教えた。

別荘を出た後、潔子はその後バリの叔父のところへ行くつもりだと話した。東京へ戻った楠田は順子に電話で、食事の約束をした。同じころ藤島邸が火事になり、元子は焼死した。

「志鎌深雪の青春」(短編13頁)『マドモアゼル』42・12

志鎌深雪は十代の頃、父親も含めて男性に対して異常なほどの嫌悪感を抱いていた。男性と握手した手でそのまま抹茶をたてられたら、嗜着にひっくり返してでも飲むのは嫌だった。十一歳頃には、父の後のお風呂に入ると妊娠すると思ひ込んで、三ヶ月も食欲が落ちたりした。深雪が十五のころ、母は父の女道楽と金の無さから母子心中を企てた。そんなことが深雪の性情を解く鍵になりそうである。

志鎌家は千葉県香取の代々の地主で、明治以降は味噌、醤油の醸造

で財をなした。父正治は大正五年に四人目に生まれた長男で、溺愛された。十歳で小児麻痺にかかった。病後に父親から、当時貴重なライカを買ってもらったからは、カメラに没頭した。その内に、奉公している少女の裸体を撮ることに熱中しだした。

昭和十年ごろから国策宣伝会社の写真部員として働くようになると、取材に行ったら裸体写真を撮ってきていた。十五年に結婚した妻菊子は、初めは秘密命令で撮っているという夫の言葉を信じていたが、次第に疑いをもった。戦後は正業に就かず、雑誌社の囑託になって小間切れの仕事をしながら、相変わらずヌードを撮って売っていった。ある日やくざが父を追ってきた。母の機転で難を逃れたが、それから一ヶ月後に、母が深雪と心中しようとしたのである。深雪はますます男の存在を不潔に思うようになった。

父は、深雪の高校卒業直前に白血病で死んだ。昭和二十年の八月七日、広島全滅の報に呉にいた父は、モデル兼現地妻だった女を捜しに広島へ行っていたのだ。十五年後に発病したのだった。

深雪は高校卒業後、商事会社に勤め社内の男たちから誘いも受けたが、相変わらず男性を嫌っていた。しかし、二十五になりもはやベテランとなった深雪には、二人の男友達ができた。一人は能楽師、今一人はダイバーである。どちらも素顔を見せぬ男である。結局二人とは結婚しなかったが、サラリーマンと結婚し、二人の子供を生んで、今ではころころと太って団地に住んでいる。

「能面の家」(短編)『オール読物』35・5

門脇虎光は二六才、神田大学四年で夜警をして収入を得ている。小説は、結婚しようと思っていた井出節子(三十才)の自殺事件に疑問をもった門脇の、検察庁係官宛への告発状の形式をとっている。

門脇は北陸出身で、父は黒沢という古い醤油屋の番頭をしていた。高卒後一年は父の希望通り黒沢醤油に勤めたが、上京しなかった。五

人兄弟の長男で、父は反対し経済的援助も望めなかったが、母がかばってくれた。醬油屋の三男で東京で有名な会社に勤めている黒沢弘三の応援も有難かった。上京後の夜警の仕事も弘三の紹介だった。

節子は友人笹原の従姉だった。笹原の下宿へもぐり込む形で共同生活を始め門脇に、節子を紹介したのは笹原だった。そのころは夫の井出も健在で、機械いじりの技術を生かしてアルバイトをし、夫婦で百万円の貯金があった。井出氏が癌で急死した後節子は、保険の外交をしたり内職したりして娘と二人で暮らしていた。

井出の死後、門脇は節子に愛情を抱き、大学を卒業したら結婚したいと思っており、節子も応ずることは間違いがないと考えていた。

節子の死後、暮らしに困った様子がなかったのに、貯金の残額が十五万円しかないのに、節子の姉は不審をもった。門脇は姉に二人の事情を話し、遺品としてもらった札入れから、金融業者の「求資、担保貴殿名義絶対確実、利息月四分」という広告を見つけた。自殺の原因がこれだと思った門脇は、その栄商事に近づいた。

「遊んでいる金を生かしたい」と電話をし、栄商事社員三井に、社長小畑の中野区の家で会った。偽って黒沢弘三と名のつておいた。小畑の家には、沢山の能面が飾ってあった。信用させる為に、黒沢から借りた貯金通帳を見せた。

紹介された物件は、栄商事の隣の鮎屋で八十万円借りたいという。佐山という社員が扱っていたが、念入りに調べたら、鮎屋の主人が当の佐山であった。ほころびが出てきた。どことなく品のある三井に丁寧に謝られ、次の物件、尾山台の住宅につれていかれた。途中で寄った料理屋で三井は、山男だったが友人を山で亡くして、何もかもいやになり、地上で金の為に働くことにしたと打ち明けた。物件の辻家では六十万円が入用という。やや古めかしい日本風の建物だったが、しっかりした家造りだった。借地だったが、権利は承諾書をとるといふ。ここにも能面が飾られていた。門脇は節子と栄商事の接点が見つから

ないまま、やるどころまでやろうと決めた。

そして登記所で、登記簿謄本や土地台帳、公図の閲覧をした結果、辻家が公道から離れ、隣の清水家の地所の中に小島のようにあることがわかった。辻家を再度訪れたとき、奥さんが使っていた傘が節子のものであったのを知った。小畑社長の家も清水のものであった。借地権を悪用した悪質な金融業だった。節子の通帳の記載は、門脇がたどった鮎屋、辻家の金額と同じであった。

検察に門脇の手紙が届いたのは、栄商事が手入れを受けた翌日だった。末尾に、節子のことは却ってさばさばした、と書いてあった。

#### 「一日一善」(短編)『文学界』35・2

西田は厚生省の都市衛生課課長で、三十五才である。

冬のある日、西田夫婦は、ひとり息子秋雄のQ大初等部入学的の困惑を頼みに兄の所に行った。兄は電電公社に勤めていて、友人にQ大教授がいるときいていたからである。

西田はQ大初等部へ子供を入れることに夢をかける親を嫌悪するが、町の小心翼翼とした教師や俗なPTAとつき合うのは、もっと嫌だった。兄に「できる子はほっておいても入る」といわれ、「僕は子供の素質をあまり期待していない」と応えた。西田は親が子にしてやれる最大のことは、期待しないことだと思ふことがあった。肩を張った兄の生き方を肯定しながらもどこか幼稚に思えた。

嫂の手料理で昼食をごちそうになって、いとまを告げた。帰りかけて、ふと近くの海岸へ行きたくなった。冬とも思えないほどの暖かさだった。浜にボーイスカウトの団がいた。子供たちは小学校高学年位で、隊長と呼ばれる青年がまじっていた。子供たちは石投げをしようといい出した。隊長は危ないからさせたくなさそうである。「大丈夫ですよ。責任をもちます」と一人の子供が答えた。西田は「子供ってのはグロテスクだ」と小声で妻にいった。矛盾しているのに子供は

気がつかない。責任をもつというのも気に入らないのだ。その内に別の一人が「自由行動の方がいい」といい出して、石投げはやめになった。

西田は子供たちの言葉も考え方も国籍不明だと思った。彼は三年間内地の軍隊で過ごした。同級生は二割が死んだ。戦争と軍隊なしに自分を考えることはできなかった。ボーイスカウトの子供たちをみていて西田は今初めて、彼が軍隊にいたときに戦うべき本来の敵に会ったような気がした。異様な服装をし、かつての日本語になかった言葉を使い、いいたいことを言い合う集団は、外国の軍隊を思わせた。西田はこのとき、ぬぐいような不幸感をあたためていた。決定的な原因のない不幸が確かにある気がした。心の深部にいつからかすくっている暗い空洞のようなものであった。

西田は妻をさそって岩にのぼった。降りるときに、下から滑り落ちないように手を添えてやったが、彼の親指を妻の踵が一瞬踏んづけた。血が滲んでいた。そのとき、「小父さん！」と子供が改まった声で呼んだ。「薬をつけてあげましょうか」と赤チンを出した。薬を塗ると仲間の元へ帰っていった子供を妻は、「今時 あれ位ちゃんとしてる子は珍しい」とほめた。西田は「あいっらは一日一善というモットーがあるんだ。僕の指に薬を塗れば、今日一日何もまじなことをしなくてもいいのさ」といった。彼は軽い非難と侮蔑と同情のまじった妻の眼の色をみた。

「諦めない女」『婦人生活』34・10〜35・10

CBA（中央放送協会）の録音班の一行がルポのためP県にある精神薄弱児の保護施設「さざなみ園」を訪れたのはまだ残雪が富士に見られる春のある日であった。

園主、西蓮寺千香は三十一歳、ミッションスクール出身の美しい女性で、最近代議士の最上熊雄と離婚したばかりであった。彼女が不幸

な子どもたちに愛の手をさしのべようと決心したのは、遠い心の遍歴があった。千香は十九歳の時、無人踏切で精薄の娘を道づれにした母子心中を目撃したが、そのとき生き残った娘の妖しい笑い顔が、終生ぬぐい取られぬほどのショックな事件として、若い彼女の心底に焼き付いた。

やがて、彼女は父母を相次いで亡くした二十四歳の時、二十歳も年上で再婚の最上建設の社長最上熊雄と結婚した。結婚二年目、夫の会社の技師の妻が、小児麻痺の子どもを殺した事件が起こり、夫はその技師を会社から追ったが、それを機に千香は、年来の希望の如く、父母の遺産だけで独自に「さざなみ園」を開設した。そしてまもなく夫と別れたのである。夫が園の精薄の娘に手をつけ妊娠させたのだった。離婚後、夫には隠して子どもを産ませ、自分が育てようと決心した。

そうした千香を痛ましい目で眺める人に有馬医師がいた。彼は、千香の協力者として園児の衛生関係を受け持つ三十五歳の独身男性だったが、禿頭のために縁談がまとまらないのだ。弟清二郎が気兼ねしながら「さざなみ園」を手伝っていた海道菊子と結婚するといってきたときも、微笑んで美しく生まれた弟を祝福してやった。彼には人間が最も人生に意義を見いだす結婚や恋にも、ただの傍観者であった。わずかに彼は、美しい千香と一つ仕事をすることに人生の喜びを感じていた。

そんな彼を驚かせたのは、無謀と思われる千香の衆議院立候補だった。しかも別れたとはいえかつての夫と同じ地盤で争うのだ。誰が考えても不利な選挙に、なぜ千香は立候補するのか。その上新聞記者あがり、入れ墨をした沢本を選挙事務長にして戦おうとしている。有馬ははら／＼とした思いで眺めていた。

別れた夫婦の争いに、世間では様々な疑惑や好奇の眼差しを寄せた。園内でも管理を担当しているしっかり者の桜田辰子は、千香の立候補にはっきりと反対した。しかし、園には一切の迷惑をかけないで、働

く婦人や母子家庭のために戦うと説得する千香の意欲に、園内の人々も賛意を示した。

選挙の前哨戦で千香が奔走する中で、ある日突然最上の子が発病した。千香の必死の看病もかいなく子どもは死んだ。何も知らない最上は、対立候補である千香をいろいろな手をつかって妨害し始めた。桜田辰子の新聞投書は格好の材料で、中傷するピラを作るなど策謀をめぐらせていた。

一方、有馬医師を愛しながら報われなままに、弟清二郎と結婚した菊子は、交通事故で失明した。鋭敏になった菊子は、有馬と千香の間に何かを感じていた。しかし、有馬は選挙に関してはあくまでも傍観者の立場を貫いていた。ある日、有馬に縁談が起こった。相手は、菊子の親戚筋の未亡人で四歳の男の子があった。有馬は、千香を忘れるためにも、相手にあった。そして、結婚しようという心が動いたが、菊子に千香を慕う心の裡を指摘され、縁談を断った。

選挙戦が激化してきたある夜、「さざなみ園」の向かいにある三河屋酒店の一人息子が殺された。犯人として園の二人の精薄児が捕らえられたが、事件の裏に二人をそそのかした者がいたのではないかとの疑惑が残った。

かつての夫最上と立会い演説会場で顔を合わせた千香には、もはや愛も憎しみもなかった。今はただイデオロギーの戦いがあるだけだった。会場を埋め尽くした聴衆の前に、ヤジを受けながら演説する千香は孤独を感じていた。そのとき知らせるようにマッチを擦った有馬の顔が暗闇の中に浮かんだ。有馬の存在は不思議な力を持って、千香の心を満たしてくれた。

殺人事件は、背後で園児をそそのかせた最上派運動員の策動が発覚して、一転した。手がかりは、視力を失った菊子の鋭い臭いの記憶によるものだった。

選挙戦の終盤になったある晩、有馬は久し振りに銭湯に行き、他候

補に比べて千香は大分弱いという下馬評を聞いた。悪い人ではないが、家庭よりも仕事を大切にする職業婦人です。つきにくく冷たい女ということらしい。美貌も婦人層にはねたみの種らしい。

投票日前日の深夜、千香から「会いたい」と有馬に電話があった。有馬は、今は会わない方がよいと答えた。千香は「先生に遠くから見ているだけで幸福でした」と告げた。有馬は千香が当選しないで、今のまま「さざなみ園」を続け自分はこれまでのように千香を助けたいと思っていた。千香が議員になったら、千香を諦め子供たちも捨てようと考えていた。

投票結果は最後の議席を最上と千香が争う接戦になった。そして千香が当選した。

五日後、久し振りにふたりは再会した。有馬は、「ぼくは、面倒くさがり屋で人から見放されたような人とき合うのは自信があるが、あなたには何をしてあげられるだろうか。僕には今のあなたは重荷だ。あなたを失うことはつらいけど、それ以上にあなたを得ることは重荷だ」と思った。千香は涙を浮かべながら、「私も五日間考えて答えを出してきた。今まで先生と一緒にやってきて、これから一人でやれるとは思えません。重荷を背負ってください」と答えた。有馬は「今の一言を聞かなかつたら、あなたときれいに別れるつもりだった。でもそうもできなくなつた」と応じた。

(本学准教授)